

## バングラデシュからの便り

2017年も、私はバングラデシュで半年程出張する日々が続いています。現在、私は、(公社)日本環境教育フォーラムの職員として、コミュニティレベルにおける小学生を対象とした生物多様性保全の教育、漁師のエコツーリズム開発、天然蜂蜜採取やウエイスト・ピッカー(ごみ拾い人)の労働・生活の支援活動等を継続しています。昨今、バングラデシュでは、ミャンマーから同国へ避難してくるロヒンジャのことが大きな問題の一つとなっていますが、今回は、現地で議論の的となっているバングラデシュの人々の社会・生活の課題について報告したいと思います。

環境の話で言えば、気候変動がバングラデシュに及ぼす影響について引き続き大きな課題となっています。IPCCの予測によれば、ここ5年の間で2000万人が今の住んでいる場所から立ち退かなければならなくなるということです。ダッカ等の都市部では人口が集中しており、700万人の人たち(ダッカの人口の4割)は、スラム街や河川沿い等の脆弱な場所で暮らしています。気候変動は、同国にとって深刻な問題の一つです。

また、上記と関連して、バングラデシュのダッカ等の都市部における住居空間の狭さ、家賃の高さや住環境の悪さ等についても指摘されています。政府としても住環境の快適さを改善する政策をつくって努力しているようですが、国土が北海道の2倍近くのところに、約1億6千万人が暮らしており、人口密度の高さを物語っています。

さて、同国の国魚であるイリッシュ(ニシン科の仲間)は、適切な漁業資源管理が行き届いていないため、その数が減少しているようです。イリッシュは油がのって風味も良く、揚げて食べるととてもおいしい魚です。イリッシュの漁業資源を守るためにも、漁師、漁業ビジネスマン、政府やNGO等が連携して、イリッシュを国の宝として適切に保全していくための共同管理のあり方をさらに検討していくことが求められます。

教育の話に目を向けると、「バングラデシュの学校のグラウンドが魚の養殖場になる?」といった新聞記事が掲載されていました。学校の運営資金に充てるのが目的のようです。しかし、子どもたちの遊び場や行事等を行う貴重な場所が奪われてしまい、疑問に思いました。学校内部では同意が得られていたようですが、学校を監視する教育省地方局は知らなかったようです。

最後に、奴隷的な重労働を強いられる児童労働等が多く、引き続き大きな社会問題として挙げられています。国際労働機関(ILO)が提唱し、SDGsの8番目の目標でもある、ディーセントワーク(働きがいのある、人間らしい仕事)の実現を、個人、組織、社会が目指していくことが求められます。

平成13年度3次隊、エクアドル、野菜

所属: 公益社団法人 日本環境教育フォーラム

氏名: 佐藤 秀樹

Email: [hideki\\_sato@jeef.or.jp](mailto:hideki_sato@jeef.or.jp)